

マと近い先輩や教員が存在するとは限らない。事例も複数参照できるほうが望ましい。特に、女性院生・研究者の割合が増えたとはいってもまだ少数で、参考になると思えるロールモデルが身近にいないことも多い。一方で、教員も院生も日常業務や個々の業績製造に追われる傾向がある。プライバシーへの配慮も必要で、私的な経験や悩みをゆっくり気兼ねなく語り合う機会、余裕も減っている。本書のような場で、研究と生活のよりよい両立を試みようとして試行錯誤している仲間の姿が可視化される。その結果、「自分もこれでいいのだ」「こうすれば何とかなるかもしれない」「同じように悩み、悪戦苦闘している人がいる」と、励まされ、気持ち前向きになる人や、工夫や可能性に気づく人が少なからずいるだろう。

これは女性だけではなく、男性にも当てはまる。両性が互いの状況や想いを知ることで、相互に刺激し、助け合うこともできる。女性だけが工夫し、変わろうとしても世の中は変わらない。男性も試行錯誤しているし、育児に積極的に参加したいと考えている（けれども様々な事情で実現できていない）人は多い。

地理学に携わって研究、教育をしている者には、現場での発見が楽しい、出かけることができるから地理屋になった、という人も多いだろう。本書を手にした地理を学ぶ若い世代のなかにも、紹介されている多彩なフィールドワークの描写に心がワクワクする人があるだろう。それでも、評者もそうであったが地理学に興味を抱いた（女子）高校生が、卒業・進学の間には「なれる職」として理解できるほど身近に情報がなく、好きな地理を仕事にできる先としてフィールドワーカーを想像することはかなり難しいように思う。たまたまテレビなどで登場する（女性）研究者は、研究の内容もスタイルもあまりに強者過ぎ、生活人としての実感がなく、ロールモデルとは思えなかった。地理学や研究に興味はあるが、それをどう形に育て、職にする道があるかに気づく機会がないまま、進路・職業選択の時期を過ぎる人もある。このような本との出会い、「人生の選択肢になり得るかもしれない」と動機づけられる後輩が少なからずいることを信じた。高校の進路指導室や大学のゼミ室、図書館などに本書を1冊置いてみてはどうだろう。

一方で、評者と同様、あまりにアクティブな先人の姿を見て、自分とはかけ離れた世界と諦める者も少なくない気がする。それではもったいない。本書の事例は、評者とは比較にならないほどアクティブで、困難

な条件下にある子育てフィールドワーカーの語りが多く、評者も正直圧倒された。題目で「女も男も」と掲げつつも、女性研究者育成をより意識しているため、男性が執筆したトピックは少ない。海外を対象とする研究者のトピックが多いことで、国内を中心に活動するフィールドワーカーの姿が見えにくくなっている感もある。刺激的な海外研究の事例が多いので、国内調査はそれに比べて地味、と印象を抱く人もあるかもしれない（ただし、他巻のトピックで情報を補える）。

また、ライフステージが進むなかで、自身のテーマやフィールドを継続するための工夫を編み出し、「いかに変えないか？」を追求する者もある。しかし、変化に合わせて活動を工夫する過程で、見えなかったものが見えるようになり、テーマやスタイル、対象地域を戦略的に発展させ、開拓する華麗なる転身者のほうがむしろ多いのではないか。このような変更も、意義があつてのことなら前向きな選択で、決して「負け」ではない。執筆者の大半が30・40歳代でまだ元気だが、加齢や病気などによる心身の変化への備えや活動調整は、本書で十分カバーできていない。

そう考えると、国内調査を主とする者や、院生仲間や共同研究の機会が少なく苦闘してきた者の例、あるいは男性研究者の子育て奮闘記、加齢により研究スタイルを変えていった方の話などの割合も高め、バラエティーある章構成だとよりよかったと感じた。また、実際の就労では、業務内（研究、教育、管理運営、社会貢献）のバランス調整も迫られ、育児や介護以外の多様な生活人の顔もあり、もっと複雑な日々、悩みがある。職場や人との関係もあり、あえて割愛されていると推察したが、そのあたりも少し垣間見られると、後輩は研究者の日常をよりイメージできるだろう。

本書の役割は、研究者を目指す人々への情報発信だけではない。評者を含む団塊ジュニア前後の世代の研究者たちにむけて、自身の経験を踏まえて後輩が活発に研究・生活できる環境や、くらしやすい社会をつくる場づくりや工夫に心がけて参加、貢献せよ、と働きかけているように感じる。あわせて、上の世代にむけては、活動の器となる社会が変わるなかで、研究や生き方をみるものさしにも調整が必要になってきていることを受け止め、あたたかく後進を応援して頂きたいとの願いも込められている。大学教員は研究者でもあるが、将来世代を育てる役割も担っている。若手だけでなく少し先を歩む人々にも、一読の意義がある。